

Q：現在、台湾の幼児体育教育は、「白髪経済」へとシフトし、高齢者向けの「楽齡コース」を展開しています。何故、幼児体育に一生懸命になれないのでしょうか？台湾で幼児体育よりも、高齢者向けの「楽齡コース（楽しく齡を重ねるための運動プログラム）」が目立つようになっている背景には、何があるのですか？

A：

1. まず、急速な高齢化と「白髪経済」の市場規模でしょう。

台湾は、世界でもトップクラスのスピードで高齢化が進んでおり、65 歳以上の人口割合はすでに 20%前後に達しています。

また高齢者向け市場は「白髪経済（Silver Economy）」として注目され、行政や企業の投資もこちらに流れやすくなっています。

そして、高齢者の健康寿命を延ばすことは、医療費・介護費削減の観点からも、政府にとって喫緊の課題だからでしょう。

2. 2つ目は、少子化による幼児人口の減少があります。

台湾は、出生率が世界最低水準（合計特殊出生率 1.0 以下）で、幼児の総数そのものが減少しています。

また、幼児体育の対象者が減ることで、事業としての採算が取りにくくなります。

幼児体育のインストラクターや施設への投資よりも、高齢者向けプログラムの方が短期的に利用者を集めやすい状況にあるからでしょう。

3. 3つ目は、親の教育志向と運動軽視があることも、事実です。

台湾の多くの家庭では、幼児期から学習塾や早期教育に投資する傾向が強く、体育・運動は後回しにされがちです。

親が「運動より学習が大事」という価値観をもちやすく、幼児体育の参加率が低くなる悪循環があります。

4. そして、政策・制度面のバランスの偏りもあるでしょう。

幼児体育は、教育部門（教育政策）の中で扱われますが、予算配分が限られており、全国的な普及策が弱い傾向があります。

一方で、高齢者向け運動は衛生福利部（保健・福祉政策）の健康増進予算で推進され、地方自治体単位でも補助金が出やすい状況だからでしょう。

5. 短期的成果の見えやすさもあります。

高齢者の運動支援は、比較的短期間で筋力向上や転倒予防などの効果が見えやすく、事業評価や広報にもつながります。

一方で、幼児体育は、効果が長期的に現れるため、政策立案者やスポンサーが「成果を実感しにくい」と感じがちです。

もしこの流れを変えるには、幼児期の運動が将来の医療費削減や学力向上につながる」という科学的エビデンスを発信する必要があります。

また、高齢者と幼児をいっしょに運動させる「世代間交流型プログラム」の展開、幼児体育を保育カリキュラムの必須要素として制度化するといった戦略が有効だと思います。このままだと台湾の「体育産業」は高齢者中心で成熟してしまい、将来の子どもの身体能力低下につながる危険もあります。

要するに、社会構造・政策・文化の三つが重なり、幼児体育が後回しになっているという状況です。

さらに、大学の研究関係者で、幼児体育のわかる人、本気で幼児体育を継続して発展させようとする人が少ないのも、この傾向に拍車をかけているのかもしれません。

(前橋 明)

子どもの健康福祉研究所